

# 芭蕉の近世的性格とその限界

森 秀 男

「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休が茶に於ける其の貫道する物は一なり。」芭蕉の風雅觀の根本を示すものとして、しばしば引用される「笈の小文」の冒頭に記された中世的傳統への自覺が、芭蕉俳諧の「さび・しをり・ほそみ」などといふ美的理念を支へてゐるには違ひないが、そのことから、單に芭蕉の中世的世界への復歸のみを強調し、これを偶像化する精神的系譜主義によつても、また逆に中世的なものを克服しようとするのあまり芭蕉の全面的否定を試みる性急な偏向によつても、ひとしく芭蕉俳諧のもつ近世庶民的性格は切り捨てられてしまつてゐるのであり、たとひ中世的傳統への妥協はあるにしても、芭蕉によつて完成された俳諧といふ文學形態の歴史的究明とともに、その藝術的深化の過程における近世町人乃至庶民との社會關係を追求しない限り、西鶴、近松とならんで近世庶民文學の一つの頂點をなしてゐる芭蕉俳諧の本質を明かにすることはできないのである。

近世初期の商品・貨幣經濟の急速な發展は、その擔當者としての町人階級を一つの新しい勢力として社會の表面に押し出したが

それも飽くまで封建的階級制度の重壓の下での曲折を経た發展であり、その經濟的實力も直ちに社會關係に於ける向上を意味するものではなかつた。しかも町人の依據した商業・高利貸資本は、一應支配階級の拘束と支配とに對立してその權力を切り崩しながら、その利潤・利子を封建的生産様式から搾取するために、これを分解せしめつつも、なほ自己の搾取土壤としてむしろ保持して行かねばならないといふ保守性を運命づけられてゐたのである。従つて町人階級は、その生産的に展開することなしに封建制に對して寄生的にのみ機能する社會的性格の故に、經濟力の優位にも拘らず、その意欲を思想的制度的自由への要求にまで高めることなく、また封建的支配との闘ひの中に自己を解放しようとする方向に進むことなしに、抑壓の強化とともに停滞と自己腐敗に向はざるを得ず、ただ感情と本能の側面への限られた解放も、町人の充溢せる生活力から生じた自信の上に築かれたとはいへ、その世界の終局的無秩序は、享樂・感溺から破滅・諦念の道を準備するものであつた。そして町人家學はこの近世封建社會の歪められた現實、またそれによつて抑壓されこの歪みを持つたまま成長した町人の生活意識の表現なのである。

然し近世文學の歴史を見て行けば、その性格は一樣ではないのであつて、一般に文學に於ける上方と江戸といふ分類が、單なる地理的關係ではなく時代的歴史性を持つものとして、近世社會發展の過程に於けるそれぞれの時代の社會關係が特殊的に表現されてゐることは既に知られてゐる、その相違については種々の事情を考へることが出来るが、基本的には大阪町人と江戸町人の生活基礎としての商業資本の質的差異にもとづくものと言はねばならない。上方文化の母胎となつた大阪町人の巨大な商業資本にも發展と停滯の過程があつたが、少くとも近世初期に於いては、一應順調な成長を遂げてゐるのであつて、それは都市の發展と交通の發展が農村の分解を押し進めることによつて生み出した、商業的農業の分布にもとづく國內市場の展開によるものであらう。封建領主が農民の貢租負擔力を維持擴張するために、その初期に於いて許容しなければならなかつた商業的農産物の栽培は、封建制そのものの持つ特徴的性格のために、生産の進展を極めて多難とされてゐたが、經濟社會の趨勢はさうした制限の中で、家父長的な農民經濟を商品經濟の方向に近づけつつあつた。この農村に於ける古い隸屬關係に對する獨立化の闘ひを實現化する過程を通じて、近畿地方をはじめとする全國農民の生長と生産力の向上が、元祿時代の大坂また全國の商業を發達させたのである。かかる環境の下に近世初頭以來勃興しつゝあつた大阪町人は、その商業資本的性格による制約を持つてゐたといへ、封建制の内部にあつては相對的進歩性を擔ふものであり、しかも元祿を中心とする時代は商業資本が發達の限界に達しようとした時期であつたために

その文學的代辯者としての西鶴の「一代男」に確立をみた近世アリズムは、愛欲生活をめぐる從來の佛教的儒教的觀念から一應解放された町人の世界、その豊かな現實を生き生きと寫實的に描き出すことによつて、上昇期の經濟社會の創造的エネルギーを押し出すことができたのであつた。

西鶴の浮世草子は町人みづからの生活を、町人みづからの視角で寫し出すといふ、町人文學に課せられた歴史的要求に應じたものであつたが、西鶴のさうした現實主義的態度は、既にその談林俳諧に活動した時期に於いても見ることが出来る。俳諧が小説や戯曲に先んじて民衆詩としての任務を果し得たのは、町人の現實的要求が當時まだ具體的なものにまで高まらず、ただ氣分としてあらはれてゐるに過ぎなかつたために、それを最も適切に表現し得る形態として俳諧といふ短詩型の文學が選ばれたからであらう。俳諧の歴史は舊貴族の固定に止る中世和歌及び連歌への反抗のうちに始まつたのであり、その反抗ははじめ無意識的な形でなされてゐたとしても、停滯した花鳥詠趣味に對して庶民の卑俗性を折くことによつて、民衆詩としての獨自な成長を開始したのであつた。貞門の出現は宗鑑以來の俳諧にとつて一つの轉機であつたが、貞徳の出身とその中世的教養に支配されて、庶民性を用語の上にのみ限定し、俳諧は一句ごとに俳言を賦した連歌であるといふ見地からは、傳統破壊は微溫的にしか行はれず、結局は言語遊戲に終始するものとならざるを得なかつた。かかる保守的な貞門に對して、新しい町人生活の現實を彼等自身の手で謳ひ上げようとしたのが談林の俳諧であり、傳統的な形態の中で煩瑣な法式

の制約を受けながら、なほ在來の花鳥風月的題材を乗り越えつつはじめて町人生活の種々相を取り上げ、寫實主義的生活による荒々しいまでの現實浸透を示したところに、その史的意義を認めねばならない。談林、特に西鶴の俳諧は、町人的現實の諸斷面を烈しい興味と關心をもつて捉へ、敘事詩的表現を與へたものであり時代の典型的面を描くことに一應成功したのであるが、所詮俳諧形式によつては現實の斷片的取上げは可能であつても、それに藝術的彫琢を加へる餘地はなく、まして現實の全般的追求をすることはできなかつた。更に季節や定座の鞏固な制約は傳統を生かし續けて來た原因ではあつても、廣汎な現實、人間生活を捉へようとするには、全く障礙となつてしまつたのである。かかる形態に對し、西鶴がその法式を無視することによつて生れた矢數俳諧に於いて、他の制作よりも遙かにその力を發揮してゐる事實は、そのまま彼が俳諧から浮世草子へ轉化する必然を物語つてゐるのであり、西鶴の現實への關心が成熟するに従ひ、俳諧の二句間の間隙を現實で埋めつくして、現實の諸斷片でなくその論理へ迫らうとした以上、散文形式に赴かざるを得なかつたのである。

西鶴が浮世草子作家に轉化して行つた後は、俳諧の歴史は専ら芭蕉の手に委ねられ、貞門談林を通じて近世的傾向を強めて來た俳諧は、芭蕉によつて抒情詩としての確立を見るのである。然しこのことから西鶴が俳諧に行きづまつて散文へ轉じ、芭蕉が代つてこれを完成したといふやうに、俳諧を固定化して理解してはならないのであり、それは西鶴と芭蕉が同時代の作家でありながらそれぞれにその要求を果しつつあつた地盤の相違にもとづくもの

として把へることが必要なのである。

芭蕉の生涯に於いて、主君であり俳友であつた蟬吟の死が最初の轉換期となつたのであるが、それによつて芭蕉は自己の武家としての將來に希望を持ち得なくなり、間もなく武家社會から逸脱して行くに至るのであつた。「貝おほひ」(寛文十二年)に於いて亡命後の芭蕉は近世町人の利根的享樂的な現世思想に醉つてゐるのであるが、それ以後武家出身の故もあつて、西鶴のごとく新興の町人階級に密着して自己の生活と運命とを追求することができず、町人の享樂主義の限界、解放が本能と感情の側面に限られてゐる狹隘さと、それが結果する必然的不調和に自覺的ならざるを得なかつた。

富貴喰三肌肉二丈夫喫三菜根三予は乏し

雪の朝獨り干鮭を喰得たり

とかつて武家の身分を放擲し今また町人の世界をも見捨てた芭蕉は、遂に近世的現實そのものを全く無意義なものとして拒否する外なくなるのである。既に芭蕉は延寶初年に於いて町人的現實を取り上げても、古典との關聯の下に常にそれを情趣化してゐるのであつて、西鶴の俳諧が取り上げたのは、町人社會の現實の種々相そのものであり、やがて散文形式に立ち向つたのは必然の結果であつたが、「ある時は任官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋にたながる」(幻住庵記)と最後まで俳諧を捨て得なかつた芭蕉はその藝術的深化を願ふ限り、現實そのものの取り上げ

や追求の方向に進まうとしなかつたのはまた當然であつたらう。町人の現實の再現といふ役割を持つた近世文學は、その優位性を散文に與へたのであり、ここに芭蕉に残された道は俳諧形式によつて如何に自己表現の課題を果すかといふことであつた。

近世初期に於ける古典復興は、時代生活から遊離した單なる知識としてのものではなく、何等の文化傳統をも持つてゐなかつた町人階級が、みづからの文學を打ち立てるための不可避の現象であり、それは金平淨瑠璃、模擬物・教訓物等の假名草子に見られるやうな積極的意義を持つものであつた。特に談林俳諧にあつてはその古典攝取の態度は傳統への守成的なものではなく、みづからの生活現實を表現するためのものとして、そこでは古典の傳統性は無視されて、ただそれを如何に現實再現のために利用するかが問題とされたのであるが、芭蕉に於いては延寶九年の「俳諧次韻」の頃からあらはれる唐宋詩文や莊子への關心が、單に表現の手段に止らず、それへの追慕の形となつてゐることは注意されねばならない。天和三年の「虛栗」になるとこの傾向は一層強くなり、「栗と呼ぶ一書其味四あり。李杜が心酒を嘗て寒山が法弱を襲る、これに仍而其句見るに遙にして聞に遠し、佗と風雅のその生にあらぬは西行の山家をたづねて人の拾はぬ蝕栗也。戀の情盡し得たり。昔は西施がふり袖の顔、黄金は鑄三小紫、上陽人の閨の中には、衣桁に寫のかゝるまで也。下の品には眉こもり親そひの娘、娶、姑のたけき争ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす」といふ跋は、勿論題材の擴大を誇示した新風樹立の意氣を

示してゐるのであるが、一方李杜や寒山詩を媒介として世俗を避け、藝術への精進に自己の道を見出した西行の中世的詩境への共感、單に題材のみではなく、これらを包括する觀念世界が芭蕉のうちに成立しつゝあつたと見ることが出来る。蕉風の第一聲といはれる「枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮」（東日記）は、この觀念世界から生み出されたのであり、後元祿二年「曠野」に於いて「鳥のとまりけり」と改めたのは、この觀念世界が觀照による現實的地盤の獲得によつてはじめて成されたものであらう。芭蕉は自己のうちに成立した觀念世界を現實生活と對決させねばならなかつたのであり、それによつて生活體驗から得た現實的地盤への降下が企てられたのであるが、

芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜談（武藏曲）

櫓の聲波を打つて陽氷る夜や涙（同）

髭風を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ（虛栗）

氷苦く偃鼠が咽をうるはせり（同）

などの句はその推移を示すものである。

然しこの觀念的世界を肉体化する地盤を武家社會にも町人社會にも求めることが出来なかつた芭蕉は、無意義な現實を超えて永遠を保つ自然の世界へ没入して行つたのであり、現實否定と自然への傾倒との關係は、人爲的な社會への烈しい否定的精神がおのづから自然への傾倒となつて示されたものである。従つて芭蕉に於ける自然への歸依は、近世的現實に對する厳しいイロニーにとづくものであるといふことが出来よう。萬葉中期以來自然を抒情の對象とすることは一つの傳統となつてゐたのであるが、芭蕉

以前の自然詩は一般に時代が近世に近づくほど類型的となり無感動な把握に墮してしまひ、古今新古今的な因襲の自然光照が支配的であつたが、芭蕉はこの束縛を一應は破棄して、すべて自己の直接の感動に發する自然把握を正面から押し出したのであつた。それが歪められた形ではあつたにせよ、人間性を昂揚することのできた近世初期といふ時代の創り出した可能性は、芭蕉によつて現實性にまで高められたのである。「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも私意をはなれよといふ事也。……習へと云は、物に入てその微の顯で情感する也。句となる所也。たとへ物あらはに云出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物と我二つになりて其情誠にいたらず、私意のなす作意也」(あかさうし)「蕉門は景情ともに其有處を吟ず、他流は心中に巧まるゝと見えたり」(去來抄・修行教)この對象を有るがままに把へようとするのが芭蕉のいふ「誠の俳諧」であり、その根柢に一つの寫實主義が主張されてゐるのであるが、然し「たとへ物あらはに云出ても」といふ一語を見落してはならない。この一語によつてその對象の有るがままの把握の意味が表現以前の態度の問題であつたことを知り得るのであり、「常風雅に在るものは、思ふ心の色、物となりて句を定るものなれば、取物自然にして子細なし。心のいろいろはしからざれば外に詞をたくむ。是則常に誠を勤ざる心の俗也」(あかさうし)といふ芭蕉の語は、因襲的制約を脱した清新な主觀を確保し、美的感動の純粹を期する觀照態度によつてのみ自然美が捉へられことを言つてゐるのである。

然し芭蕉が把握した自然は、人間の社會的生産の営みがそこが

ら生れて來るといふやうな自然ではなく、ただそれ自身の秩序に従つて動いて行く絶對的自然であつた。そこに芭蕉の不斷の努力が或る時は自然の嚴しさを自己の詩的創造の中にまで十分に受け止める偉大さを示すとともに、或る時は自然の絶對的な力の前に自己を含めての人間の無常を痛感するさまを示すことにもなる便であつて、芭蕉の優れた作品は多くかかる境地に生れたものであるといへよう。芭蕉が俳諧が現實に於ける人間の営みに詩的關心を向けることなく、却つてそれを超える外的自然の追求のうちに抒情主体の形成を専心したものであつた以上、藝術的創造の實踐に當つて自己獨自の世界を構成しようとしたのであり、そこに連句の協同性による種々の制約や配慮から解放された發句の獨立が行はれたのである。然し芭蕉が發句形式を完成して、それに抒情精神を集中しながら、同時に連句をも捨て得なかつたのは、やはり近世といふ獨立した人格を生み出し得なかつた時代のもつ制約性によるものと思はれる。

野ざらしを心に風のしむ身かな

芭蕉は貞享元年の秋郷里の伊賀へ旅立つたが、「野ざらし紀行」のはじめにあるこの句は、町人社會の意義を否定して自然に向ふ悲壯な心情が漲つてゐる。芭蕉にとつて旅はやがて死の面影さへ伴つてゐたやうであるが、この激情的な自己表白もしばらく旅を續けた尾張では、「木枯の身は竹齋に似たる哉」(冬の日)のやうにおだやかな自己觀照のゆとりを取り戻して來てゐるのであつてこの九ヶ月の旅によつて生れた二つの作品には、芭蕉が絶えず振り返つてゐた中世の和歌や連歌の世界とは違つた、かなり近世的

な詩情が盛り上げられてゐる。そして貞享四年の旅から得た「笈の小文」では、「風雅におけるもの、造花に隨ひて四時を友とす。

見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし。儼花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獸に類す、夷狄を出で鳥獸を離れて、造化に隨ひ造化に歸れとなり」と一つの確信をもつて俳諧の本質を言ひきつてゐるのであり、牧められた句にも落着いた自然觀照の境地が沁んだものが多い。

此の山のかなしさ告げよ野老堀

草臥れて宿かる頃や藤の花

日は花に暮れて淋しやあすならう

そしてこの紀行の冒頭に「旅人と我が名呼ばれん初時雨」といふ句があるが、「野さらし」の旅が芭蕉の惱みが痛々しいまでに進つてゐたのに對し、ここでは田園的自然と調和し得たふかぶかとした安定感が窺へるのである。然し元祿二年の「奥の細道」の旅になると「片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます」と何物かに憑かれたやうに自然の中に入つて行くのであつて、そこには田園的自然との調和は見られず、「故人も多く旅に死せるあり」といふ人間の無力觀が主情的なものに高まつて流露してゐる。かうした主情的な糾しさは「猿蓑」以後次第に失はれて行くのであるが、現實生活を否定しながらも「幻のちまたに離別の涙をそそぐ」と書いてゐる芭蕉は、この矛盾から脱却して諦念をつきつめようとして苦しまねばならなかつた。

長い流離の旅を経て元祿四年の冬江戸に歸り着き、やがて深川の草庵に入つた芭蕉は、翌年の春「人も見ぬ春や鏡の裏の梅」と

いふ自己の操守すべき生活と、また有るがままの風雅の孤高を嘆じ、一人淋しさに耐へる情を象徴した句を詠じたが、その秋には自ら「閉關之説」を作り「人來れば無用の辯あり、出ては他の家業をさまたぐるもうし、尊敬が戸を閉ぢて杜五郎が門を鎖さむには、友なきを友とし、貧を富めりとして、五十年の頑夫、自書、みづから禁戒となす。

朝がはや晝は鎖おろす門の垣」

と客を辭しながらなほ全く友を絶つことは出来なかつた。風雅をすら妄執と思はずにゐられなかつた芭蕉は「風雅もよしや是までにして、口を閉ぢんとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし」（栖去之辯）と意識しつつ、而もなほ斷ち難い愛着をもつて作句につながつてゐたのであり、その築き上げた詩境の高踏性から再び俗界へ歸つたところに所謂「輕み」が生れたのである。「輕み」は要するに「高く心を悟りて俗に歸る」（あかさうし）精神が辿りついた境地であつて、門を閉ぢた芭蕉が間もなく「深川集」を撰ばせた時、この工夫は既に芭蕉の心に熟してゐたのであらう。そして「炭俵」が成るに及んで芭蕉の市隱としての面目は定まつたのである。芭蕉は「足あぶる亭主に問はば新酒かな」といふ其角の句を「汝も風雅な魂はえたり。生質只句の曲なる事を好んで淋しき念なし。さるに巧言を捨て、言葉の平生に落ちたれば、行末たのもし」と許してゐるが、「くろさうし」に「俳諧は平話を用ゆ」といひながらまた「俳諧の益は俗語を正すなり」と説いてゐるのであつて、「俳諧のすがたは、俗談平話ながら、俗にして俗にあらず、平話にして平話にあらず、

そのさかひをしるべし」といふ言葉は、俳諧が鄉村に於ける富農層或ひは地方町人の層をつなぐ庶民性の上に成り立つものであった故に、その卑俗さから俳諧を文學として支へるためには舊文學的傳統に頼らねばならなかつた芭蕉の自己矛盾の統一の上から言はれたものであり、このことは芭蕉といふこの精神主義の實踐者を失つた以後の俳諧が「輕み」の世界から通俗化の道を辿つて行つたことと結びついてゐよう。芭蕉俳諧の持つ庶民性は、それが超階級的普遍性を意味するのではなく、近世的現實との對決を避けた芭蕉の階級的妥協を意味するものでなければならぬ。

新古今以來の謠念から藝術主義への軌道は、芭蕉の俳諧の中に新たな生命を吹き込まれて蘇つたのであり、近世抒情詩を確立した芭蕉の努力も、中世的傳統を破り去つたものとはいへないのであるが、而も芭蕉の主情性は生涯の終りに近く、「旅に病んで夢は枯野をかげめぐる」のやうに烈しいものとなつて再び燃え上つてをり、それには謠念の追求と藝術への意欲との矛盾が、遂に死に至るまで調和に達し得なかつた、自己の運命への慟哭がこめられてゐると思はれるのである。そして西鶴と芭蕉がそれぞれに辿つた對蹠的な道を眺める時、現實を拒絶した反社會性によつて強烈な個性を確立した芭蕉の詩精神に胸打たれながらも、やはりたとひ無自覺的であつたにせよ町人階級の現實的要求に應へ、その運命を自己の運命として描き出した西鶴に、より歴史の眞實が反映してゐると言はねばならぬであらう。

## 「給ふ」について

保坂弘司

鎌倉期の文學作品にあらわれた詞章はいろいろな点で國語學上の問題を含むが、古今著聞集などもその好資料の一つたるを失わないであらう。その「孝行恩愛」の項に

この魚を母のもとへ遣して、今一度あざやかなる味をすゝめて、心安くうけ給ひおきて、いかにも罷りならん

とあるが、この「心安くうけ給ひおきて」(國民文庫本、史籍集覽本、國史大系本)は、語法上文法上から興味ある問題を含んでゐる。いまは「給ひ」だけにふれて置く。これは四段活用であるから一般の文法から言えば尊敬の助動詞であるが、私は最近これでは一般に尊敬を表わす四段活用と謙遜を表わす下二段があるとされてゐるけれども、實際には下二段の謙遜は、用いられた時代は殆ど平安時代に限られて居り、鎌倉に入ると四段がそのまゝ謙遜に用いられたものがあるようだ。この例などもそれらしい。源氏物語の湖月抄本に「おまし立て給ひしを思ひ給ひいづれば」(夕顔)や「心とよめじと思ひ給へるやうある身に……つゝましく侍るを」(橘姫)があることは吉沢博士の指摘された様に、鎌倉朝の書写の誤と思われるが、こういふ誤の行われるだけの地盤があつたことも前記の事實に照らして承認されてよいのではないか。